

# 文芸の人類学

——アネクドローテについての覚え書——

木 下 康 光

1

アネクドローテはさまざまのところで語られる。ヘロドトスの『歴史』の中で、モンテーニュの『エッセー』の中で。兼好法師の『徒然草』でも種々のアネクドローテが語られ、人間の種々相が示される。『今昔物語集』ともなれば、まさに人間百態を映す万華鏡にも喩えられよう。これらの話の特徴は現実に起った出来事として、つまり実話として語られることである。それらは俗に言う〈世間話〉に近いものだが、近代においては作家の芸術的造形意志に浸透されて〈短編小説〉と化する。モーパッサンの短編がその代表的なものである。アネクドローテは無定形な世間話と芸術作品としての短編小説との中間に位置する。いや、その両者を両極とする広がりの中に多様な相を示す。G・コップは巷間で語られるもの、文字で書きとどめられたもの、芸術作品と化したもの、の三つの発展段階を考えるが、この三者はまた同時にいつの時代でも並びあって存している、<sup>(1)</sup>と言っている。多種多様な現われ方をするアネクドローテを概念的に定義するのは容易ではないが、本稿ではそれらの諸相を通じて窺い知られるアネクドローテの本質、概念的把

握を困難にする多義性・多面性の因となっているアネクドートの涸渇することのない生命力、ひいてはその人間学的基盤に若干の照明を当てることができればと思う。

一

アネクドーテ (独 Anekdote) という言葉はギリシャ語で〈公刊されていないもの〉、つまり秘話、裏話、こぼれ話を意味する。わが国で通常用いられる〈逸話〉という訳語は、逸事、逸聞等の用例に照らし、原語の本来の意味によく対応しており、いわば正史に対する稗史的性格、もしくは挿話エピソード的性格を示唆している。

たとえばヘロドトスの『歴史』において、地理や気候風土、各土地の珍しい風俗習慣の記述、さらには戦争の発端と経過の叙述など、それぞれに読む者の興味をそそるものではあるが、とりわけ光彩を放ち、本書に生氣にみちた魅力を与えているのは、その逸話的内容の部分であることは衆目の一致するところであろう。これらの話を語りながらときにヘロドトス自身の強烈な人間的関心が脈搏っているのが伝わってくるように思われるのだが、これによってヘロドトスの『歴史』は史書であるにとどまらず、文学性をも獲得することになったのである。アネクドーテは本来、歴史記述や伝記において挿話的に用いられたものと言われるが、このアネクドーテの持つ機能的意義についてプルタークはアレクサンダー伝の冒頭でこう言っている。「成し遂げられた大事業が必ずしもその人物の心の善と悪を示すとは限らず、むしろしばしば、とるにたらぬ振舞や発言、冗談が、その人物の性格をずっと鮮明に語っていることがあ

るものだ。」(大意)すなわちアネクドートルにおいては、英雄・偉人について語る場合でも、その関心はつねに人間そのものの、いわば、ふと漏れ見えた裸の人間に向けられていて、読者(聞き手)と同じ普遍的人間性のレベルに引き戻して——伝説と引き較べて言えば、神秘化・偶像化されたものを世俗化する仕方——語られるのである。(我々はそこにアネクドートルがのちに近代の短編小説に発展していく契機・要因を認めることができよう。)

この人間性への関心こそはモンテーニュの『エッセー』全篇を貫く根本モチーフであった。そしてここでもまた多くのアネクドートルが語られ、モンテーニュの人生観察に豊かな素材と養分を提供している。ところで、その観察態度の顕著な特徴として、極力先入見を排し、事実をありのままに、客観的に眺めようとする開かれた精神を認めることができよう。人間的事象、人間心理の不透明・不可思議を前にしては、いわば臆見<sup>ドクサ</sup>を排し判断停止をして、虚心に、あるいは謙虚に事実を事実として尊重するほかない。(逆にそのような精神にならこそ人間の不可思議さが見えてくる、とも言いうるのだが。)この事実尊重の開かれた態度、客観主義的精神は歴史家ヘロドトスもまた共有するところのもので、むしろその偏見なさのゆえにこそ「夷狄<sup>ピロバルボス</sup>びいき」という非難を蒙るはめになったのであった。<sup>(四)</sup>アリストテレスは『詩学』の中で、歴史家の仕事を詩人のそれと比較してこう述べている。「歴史家と作家(詩人)との違いは、語るに韻律をもってするか否かという点にあるのではない。ヘロドトスの文章は、これを韻文に直すこともできるであろうが、しかしそれが歴史であることは、韻律の有無にかかわらず、すこしも変わるところがないのである。両者の違いはむしろいま言われた点にある。すなわち、歴史家は実際に起こった出来事を語るのに対して、作家(詩人)は起こるであろうような出来事を語る、という点にある。このゆえにまた、創作(詩)は歴史とくらべて、より哲学的であり、価値多いものでもある。なぜなら、創作(詩作)が語るのはむしろ普遍的なことがらであり、他方、歴史

が語るのは個別的なことがらだからである。<sup>(4)</sup>——だが歴史は哲学的演繹ではなく、個別のかけらを忠実に拾い集め、帰納的方法によって全体を構成しようとする。なぜなら個別に普遍が宿っていると信ずるからである。また人間的恣意と先入見を極力排し、謙虚に事実を受け取ろうとするからである。そしてこれこそまさにアネクドートの精神なのだ。アネクドートは世界を統一的視点のもとに全体的に描くのではなく、モザイク的に呈示する。モザイクの一点一点、すなわち個々の事実（アリストテレスの言う「実際に起こった出来事」）がおのずからなる全体像を構成するのである。ヨーロッパ中世の年代記作者もまたこのようなアネクドートの精神に浸された者であった。彼は一見取るに足らぬと思われる出来事をも——もしそれが注目値するものと思われる場合には——ひとつひとつ丹念に記録し、そうして生まれたモザイク画から神意を読み取ろうとした。そこでは個別的事実が絶対的な、殆ど神聖なまでの重みを獲得する。まさに、事実（「実際に起こった出来事」＝現実）は小説（「起こるであろうような出来事」＝想像力）よりも奇なり、なのだ。ここで「奇なり」とは意外、すなわち、より広くより深い世界を開示する、という意味にほかならない。

アネクドートはある出来事を実際にあつた事として語る。この事実性こそアネクドートの生命力であり、力である。その点でアネクドートは報告的（報道的）性格を持っている。時代のさまざまな出来事（ニュース）を語るとき、それは「時代の鏡像<sup>(5)</sup>」となる。『今昔物語集』において、我々は時代のさまざまな珍しい、あるいは不可思議な出来事、人間の滑稽な、あるいはあさましい姿に出会う。『今昔』の双生児とも言うべき『宇治拾遺物語』の序文はこう語る。「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちにたうとき事もあり、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は空物語もあり、利口なる事もあり、様々やう／＼なり。世の人は是を興じみる。」これをそのまま

『今昔』の序文とすることもできる。ここでは上は貴族・高僧から下は乞食・盗賊に至るまでありとあらゆる階層の人間が登場し、その身に起こった、政治・宗教・文化から日常生活に至る人間生活の万般に及ぶ多様多彩な出来事が語られ（報告され）、我々はそこに時代と社会の鏡像を生々しい姿で見ることができるのである。『今昔物語集』の編者からすれば、主として仏法部に収められた靈驗譚のみならず、世俗部で語られる出来事のひとつひとつが、仏力の現世における多彩な現れと観ぜられたであろう。ちょうど、ヨーロッパ中世の年代記作者が個々の珍しい出来事に神意を読み取ろうとしたのと同様に。だが、たとえこれらの話が、ヨーロッパ中世における *hispel* や *exemplum* のように、勸化のための説教の例話として用いられることができたものであったにせよ、これらの話の背後に時として、作者（編者）の、既成の観念に染め上げられぬ、殆ど純粋な人間的関心がひそやかに息づいているのを感じ取らずにはいられない。この物語集が編まれた時代、平安末期という社会変動と支配的価値秩序崩壊の転換期が、現実を好奇と驚異の目をもって視ることを可能にしたのかもしれない。（同じことはモンテニユの場合にもあてはまる。すなわち彼の生きた時代も政治的宗教的対立と思想的混乱の時代であった。彼のあの懐疑精神と開かれた客観的態度は時代と無縁ではなからう。）そしてこれらの話に息づいている人間的関心こそ、時間空間を超えて、たとえば芥川龍之介の心を捉え一篇の芸術作品に仕立て上げるまで離さなかったものである。

アネクドートの根底にあるのは、この世界の中で生き死にする人間への関心と共感である。その視線の前では英雄・偉人も名もなき庶民も同じ人間の心を持つ者として扱われる。また二千年前の人間も遠い異国の人間も、普遍的人間の基盤において、等しい共感をもって眺められる。差別を知らぬアネクドートの世界はコスモポリタンな精神を宿していると言える。アネクドートはまたその人間の生への関心によってモラリズムに特色づけられている。（ここ

であらためてモンテーニュの名を持ち出すまでもなからう。)それは広義においてヒューマニズムの精神と言い換えでもよい。人間の種々相、人間という不可思議な存在のさまざまな断面——その美しさと醜さ、善意と悪意、強さと弱さ、愚かさと賢明さ、勇気と怯懦、誠実と裏切り、要するに人間の無窮の多面性——を個別に示すことによって、アネクドートルは「多様な人間の行為の展示室、人間の性格学」(ノヴァーリス<sup>七</sup>)たりうるのである。

## 二

アネクドートルは本来、その語義のとおりへ公刊されていないもの、すなわち私的レベルで口頭で語られるものであった。その点では噂話や世間話に近い性格を持つ。人間は己れの生活の安全と必要のためにできるだけ多くの情報を得ようとするが、それだけでなく、単調な日々の生活の退屈をまぎらせてくれるものに対する強い欲求からも、変わった話(ニュース)に好んで耳を傾ける。とりわけ情報の乏しい時代には、洋の東西を問わず人の集まる場所——居酒屋でも市場でも、あるいは船の中や馬車の中で、また風呂屋や床屋で、あるいは井戸端でも、要するに社交の場——人々は情報収集のため、また娯楽と退屈しのぎのため珍しい話を聞きたがった。アネクドートルは本来そのような社交的性格を帯びたものであった。その性格は今日でも失われず、社交的な場——たとえば結婚式でのスピーチ——で逸話が語られるのを我々はよく耳にする。文芸形式としてのアネクドートルは、主として十七世紀フランスの宮廷社会の中で洗練され、発達を遂げたという説も十分考えられるところである。社交性は情報性とともなアネクドートルの社会的機能のひとつと言えよう。

アネクドローテがしばしば持つ教訓的および笑話的性格もこの社交性と密接に関連している。次に掲げるのはインゼ  
ル版『アネクドローテ事典』<sup>(二)</sup>に収められた『フロックコート』という題のアネクドローテである。

高名な貴族の人文主義者ヘルマン・フォン・デム・ブッシュがルターの推輓によりマールブルク大学に教授として招聘されたときのことだが、旅装をも解かず町中にはじめて出てみたところ、人々から敬意を表されて然るべきなのに、彼を見知った者はいなかったため誰からも挨拶して貰えず、気を悪くして宿に帰った。午後にフロックコートを着用して再び出かけた。今度はみんなこぞっていそいそと彼に挨拶した。彼は宿に戻るやコートを脱ぎ捨て、それを足で踏みつけてこう叫んだ。「おまえがブッシュ博士か、それともこのわしか！」

これはおそらく実際にあったと覚しい話で、純然たるアネクドローテである。<sup>(三)</sup>さてこの話から、服装（外見）だけで人を判断する勿れ、という教訓を引き出すこともできようが、この話の核になっている、人間はとかく外見にまどわされやすいものである、という真理、人間性への洞見は、教訓よりもむしろ笑話となる方向に働いているように思われる。実際、これと同じモチーフの話がトルコの笑話集『ナスレッディン・ホジャ物語』にも見られる。<sup>(四)</sup>頓智に長けたおどけ者の主人公がさる殿様に食事に招かれ、普段着のまま粗末ななりをして行くと、それと知らぬ召使に冷遇され、あらためて黒貂の毛皮を着こんで行くと、今度は主賓席につけられる。そこでホジャは御馳走にありつく前に、毛皮のコートを愛おしそうになで、その端を料理皿につこんで「さあ召し上げれ、黒貂の毛皮様！」と言う。外見だけで左右される人間の愚かさを嗤う風刺が一篇の笑話となっている。一体に、アネクドローテ集には多数の笑話が見

られる。インゼル版にせよ、マネッセ版<sup>(一四)</sup>にせよ、その表題にもかかわらずこれらは殆ど笑話集と言ってもいいほどだし、J・P・ヘーベルの曆話集<sup>(一五)</sup>にも少なからぬ笑話が含まれていた。わが国の『今昔物語集』にも笑話的なものが見られるし、逆に、笑話集とされる『醒睡笑』は世間話を集めたアネクドーテ集でもあるのだ<sup>(一六)</sup>。これらのアネクドーテの中には巧まずして笑話になっているものもあるが、しばしば笑いの効果を狙った作為性の高い人工的な笑話に仕立て上げられ、むしろ後者が前者を量的に圧倒している。アネクドーテが笑話化する傾向があるのはその社交性に由来するのであるが、本来、人間の思量と想像力を超えて起こる現実の出来事があるがままに語るアネクドーテと異なり、意図の露骨な人工的な笑話には人間の精神に規定された一定の構造があり<sup>(一七)</sup>、パターンが定まっているため類型化は避け難い。ジョーク、頓智話、一口咄に同巧異曲のものが多いのはひとつにはそのためである。

人間の本質への洞察を内包するアネクドーテはまたしばしば教訓として語られる。それは諺や寓話と同様、その簡潔さと理解を助ける具象性<sup>(一八)</sup>のゆえに、具体的な状況の中で相手に対する説得や訓戒の有効な手段として用いられる。ただ、アネクドーテが教訓性を追求するあまり事実性をないがしろにすると、すなわち教育的意図に基づく作為が働くとき、アネクドーテは限りなく寓話に近づく。寓話は理念なり抽象的な命題を説くために現実的装いを施した喩え話であり、一般的・普遍的なものを仮りに個別的なものに置換したにすぎぬ、本来、現実世界に直接根ざさぬもの、世界との間に断絶<sup>(一九)</sup>を含むものなのである。寓話はその意味でシンボリカルでなくアレゴリカルなものである。それに対し、現実世界の断片であるアネクドーテは換喩的、もしくは象徴的性格を持つと言えよう<sup>(二〇)</sup>。アネクドーテは笑話や寓話と異なり、小説より奇であるところの事実性をその生命とする。この絶対的な重みを持つ事実性が軽んじられ希薄となるとき、それは笑話や寓話に変質していく。



アネクドローテは日々の生活の中で無数に生まれてはうたかたのごとく消えていく。それは誰かある作者によって創作されたものでなく、本来、生まれたもの、作者の刻印を帯びぬ無銘の（前）文芸であった。それはまたその伝播の過程において多数公衆によって淘汰洗練され、次第に形を整えていったと想像されるが、その無銘性と多数公衆の支持・介在という点において、それは他の口承文芸同様、一種の民衆文芸ということが出来る。それはそもそも人間生活と直結した、人生の現実を直接に映し出す、生活性の濃い文芸なのであった。この民衆性と生活性こそはアネクドローテの存在基盤、遅い生命力の源であった。

ところで本来泡沫的性格を持ったアネクドローテが、その宿命に打ち克って人々に通時的にも共時的にも語り伝えられていくことができるためには、話が印象の強いこと、すなわち明確な輪郭を持ち一定の普遍性を帯びた内容のものでなければならず、また形式面においても、本来口承されるものとしてできるだけ簡潔であること、つまり即物的で非装飾的であることが要求された。実際、文学作品化されたアネクドローテにおいても必要最小限の道具立てを除き描写は一切行われず、単一のモチーフでストーリーは直線的に展開する。

ポーランドのP……伯爵夫人なる媼おんなは邪悪な人間として生涯を送った人であったが、とりわけその領民を飽くことなき苛斂誅求によって苦しめた人であった。この女は亡くなったとき、告解後の免罪を与えてくれた修道院に対し財産の遺贈を行った。これに感謝して修道院は、この事情を麗々しく伝える鉄製の立派な墓標を鑄造させ、

墓地に建ててやったのである。翌日その墓標の上に落雷があり、ために鉄が溶けて文字はあらかた消えてしまっていたが、消え残った文字を集めて読むところ読めた。「こ…の…お…み…な…さ…ば…か…れ…た…り」——この出来事（学者にはそのわけを説明して貰いたいのだが）が事実であるということには根拠がある。その墓標は今でも残っているし、墓標に残った件の碑銘をその目で見たといい人たちが今でもその町に生存しているのだから。

『神の筆跡』と題するクライストのこのアネクドローテは、クライスト特有の息もつかせぬ緊密な文体で、一切の描写を排し、出来事の骨格のみを伝えて、まるで報告文のような印象を与える。だが白黒フィルムのごとき非装飾性によって話は明確な輪郭を獲得し、簡潔きわまりない銘文性によって強い印象と深い余韻を生ずるのである。地上の教会の赦免とは裏腹に、あるいはそれとは全く無関係に、厳正かつ仮借なく下された神の裁きを証す不思議な出来事——話の末尾でクライストがこの出来事の事実性をことさら強調しているのは、この話の生命がまさにその一点にかかっているからなのである。その意味でクライストはよくアネクドローテの本質を捉えていたと言える。

カエサルがアフリカの海岸に上陸したとき、躓いて地面に倒れた。他の者ならこれをよくない前兆と取ったであらう。だがカエサルは地面にまろび伏したままこう叫んだ。「アフリカの大地よ、余は汝を抱擁す！」

これはレクラム版『ドイツ・アネクドローテ集』に収められたものの中で最も短い、『沈着』と題された話であるが、

いわゆる装飾的な描写は一切控えられ、話の〈核〉を彫り出すために削ぎ落とせる限りのものを削ぎ落として、この出来事と発言に一瞬ほの見えた、後に大ローマ帝国の建設者となるべき英雄ならでは、些事を気にかけてぬ器量とアフリカの大地を「汝」と呼んで抱擁する気宇の大きさ、禍を福に転ずる機転と沈着を兼ね備えたカエサルの陽性で積極的な性格を、千万言を費やすよりも明快に聞き手（読者）に伝えるのに成功している。この話はカエサルの伝記の一齣、一場面にすぎないが、その断片性にもかかわらず、今見たように高い結晶度を獲得している。この結晶性の高さのゆえに、自身アネクドーテ作家であったH・フランクは次のように極言している。「真のアネクドーテというものは人間性の総計が極小の形式にもたらされたものなのだ。この凝縮にこそアネクドーテの本来的性質、とそして他の文芸ジャンルには見られぬ特別な価値が存するのだ」と。アネクドーテは珍しい出来事の単なる報告ではない。そのコンパクトな小さな形式の中に一篇の中編小説にも匹敵する内容、含蓄の深さを孕んだものでなければならぬ。それは深い人間的意味、人間の本質・本性への鋭い洞見を含んだものでなければならなかった。素材（内容）自体に文学性の胚が潜んでいるのであり、そうならこそ実際、芥川は『今昔』に材を取って数々のすぐれた芸術作品を生み出すことができたのだし、また世界最古のアネクドーテのひとつ、ソロモンの審判の名で知られる子争いの話（旧訳聖書列王紀上三―一六以下）も、ブレヒトによって新しい生命を吹き込まれ、短編小説と戯曲（『コーカサスの白墨の輪』）となって再生することができたのだった。アネクドーテはその内容の人間的意味のゆえに芸術の素材となりうるのである。

アネクドーテはカエサルやソロモンのように歴史上知られた人物について語られるだけでないことは今さら言うまでもないことだが、ドーデラーという研究者は、アネクドーテをそのテーマによって「性格（人物）のアネクドーテ」

と「状況（出来事）のアネクドローテ」（括弧内は筆者による）に分類することを提唱している。<sup>(四)</sup> そのことの当否はさておき、先のカエサルの逸話もソロモンの逸話も状況のアネクドローテとして読むことも可能なことだけは指摘しておきたい。ルース・ベネディクト女史の『菊と刀』の中に勝海舟幼少の砌の次のような逸話が見られる。<sup>(五)</sup>

これは一八九九年（明治三十二年）に逝去した勝伯爵（海舟）の話であるが、彼は子どものころに犬に鞆丸を食い切られた。彼は武士の家柄であったが、彼の家は赤貧洗うような状態にあった。医者が手術をしている間中、彼の父親は彼の鼻先に刀を突きつけていた。父親は彼に向かって、「一声でも泣声を出してみる。せめて武士として恥ずかしくない死に方をさせてやるから」と言った。

ここでもみごとに一切の装飾的描写が見られないことに気づかされるが、この逸話にしても、ベネディクト女史は勝海舟の人となり語るものとして引用しているのではなく、「武士のストイシズム」を物語る逸話として引き合いに出しているのである。むしろこの話はある人物にまつわる逸話として読むことも許すが、むしろここでの文脈では武士道精神、日本人の精神的特質を例示するために語られているのである。またフランスの作家ドーデーの短編集『風車小屋だより』の中のアネクドローテ風の小品『コルニーユ親方の秘密』は、風車に象徴的価値を与えることによって時代の変化（そして粉屋の心意気と村人の人情）を描くことに成功しているのである。このようにアネクドローテのテーマは人間の性格のみならず、時代、社会、思想、信条に及び、そのモチーフも日常の些事から政治、経済、文化、芸術、スポーツ、さらには戦争や裁判に至るまで、およそ人間の営む生活の全領域から取られるのである。ま

さに人類学的文芸と呼びうるゆえんである。

文芸の胚を内包するものとして、アネクドートルは喩えて言えば文芸の原石と言うことができる。それは小さなかけらではあるが、その凝縮度の高さのゆえに「人間の本质、事態の核心、社会的あるいは歴史的状况の要点を閃光のごとく照明して呈示する。」<sup>(11)</sup> (ヴァイスコップ) この原石は掘り出されたままのもあれば、研磨を加えて芸術作品にまで高められたものもあるが、いずれにせよ根源的な文芸、文芸の原形式として、人間が存在する限り涸れることのない生命力をもって人間世界の曼陀羅絵を描き出し、人間存在について証言し続けることであろう。

### 註

(一) Deutsche Anekdoten. Hrsg. von Jürgen Hein. 1977, Reclam, S.339. なお同書三五八頁において編者のハインもアネクドートルには、民衆的・前文芸的な日常的語りとして、一つの文芸ジャンルとして、歴史記述や伝記、あるいは現代のマスメディアにおいて用いられるものとして、の三つの存在形式があり、そしてそれら三つの可能態が密接に関連している、と述べている。

(二) Jürgen Hein : Die literarische Anekdote, ihre Entwicklung und ihre Stellung in der Literatur. In: UNIVERSITAS 37 Jg., Juni 1982, S.639.

(三) フランスの作家メリメは、アネクドートルを生む要因として、英雄・偉人の舞台裏、彼らの普段着の姿を覗き見たいと思う人間心理を挙げているという。Heinz Grothe : Anekdote. 2. Aufl. Sammlung Metzler Bd.101, 1984, S.139 参照。

(四) 世界古典文学全集10『ヘロドトス』(筑摩書房 昭和四十二年) 訳者解説(松平千秋) 参照。

- (五) 世界の名著8『アリストテレス』(中央公論社 昭和五十四年)『詩学』第九節。藤沢令夫訳。
- (六) 註(二) 論文、六三九頁。
- (七) 註(一) 前掲書、三三三頁。
- (八) 世間話については大島建彦『咄の伝承』(岩崎美術社 一九八五年)や、昔話研究懇話会編『昔話と世間話』(三弥井書店 昭和六十年)などの参考文献がある。また『言語』(大修館書店)一九八九年十二月号に「現代の『むかしばなし』」の特集があり、そこでも世間話を取り上げられている。
- (九) この社交的性格はボッカチオに始まるとされる短編小説ノヴェラの根本特徴のひとつでもあった。このノヴェレ(伊 *novella*)という言葉が本来「新奇なこと、珍しい変わったこと(↓耳よりな話)」を意味するものであったことは周知のとおりだが、もともとアネクドートルノヴェレもノヴェレも違うものではなかったのだ。フリードリヒ・シュレーゲルは、ノヴェレの根本はアネクドートルである、と言っている。(Novelle. Hrsg. von J.Kunz. 1973, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S.36)ここではノヴェレについてこれ以上触れることはできないが、ただそれがルネサンスという時代に生まれた、歴史的に規定された文芸ジャンルであることだけ指摘しておきたい。もっとも、阿部昭氏も『短編小説礼賛』(岩波新書 一九八六年)において、サローヤンの短編小説論を紹介し、「短編小説は日々すべての人によって実践されている、すべての人によって非職業的に語られ、コメディアンたちによって職業的に語られている」(同書八頁)という言葉を引用して、短編小説という言葉を「活字にならない」ものを含めた極めて広義のものとして、アネクドートルと殆ど同義において用いておられる。
- (一〇) 註(三) 前掲書、六三頁以下。
- (一一) Anekdotenlexikon. Ausgewählt von W.Purmin. 1984, Insel, S.123.
- (一二) 「噂は、それを口にする人の世界的なものに根ざしているから、その性質は著しく主観的である」(池田亀鑑「説話文学の特性」日本文学研究資料叢書『今昔物語集』一五三頁。有精堂 昭和五十五年)というのは本当である。およそ意味を持つ一切のものは人間の主観を免れることができない。とは言え、噂話の主観性は、近代短編小説の作者の主観性とはおのずと次元を異にする。もしそれがたとえ根も葉もない噂であっても、それが実際にあった出来事として語られ、事実

として——少なくとももありそうなこととして——受け取られることがアネクドートの要件である。

(一三) 紹介は次註のドイツ語版一一九頁による。邦訳の東洋文庫版(五〇頁)と細部がやや異なる。

(一四) Anekdoten der Weltliteratur. Hrsg. von F. Hindermann. 1987, Manesse.

(一五) ヘーベル作『ドイツ炉辺ばなし集——カレンダーゲシヒテン——』(岩波文庫 一九八六年)なお、こよみばなし暦話とはしごく簡単に言えば暦に載せられたアネクドートのことである。訳者解説参照。

(一六) 江戸初期に成立した、近代落語の原典と言われる『醒睡笑』には、笑話ばかりでなく、裁判話(一一三七や四一七)やしみじみとした世間話(五一六など)のごときものも含まれていることに注意すべきであろう。

(一七) 加藤尚武『ジョークの哲学』(講談社現代新書 一九九〇年)参照。

(一八) 比喩形象(譬え話も)が人間に強い印象を与え、記憶されやすいのは、それがその鮮明な具象性によってひとつの擬似体験、ほとんど生理的レベルでの体験として経験されるからであろう。

(一九) シンボルという概念を初めて詩学に導入したのはゲーテであったが、彼は『箴言と省察』(七四九番以下)の中で、普遍的なものを表すのに特殊なものを使えばアレゴリーとなり、逆に特殊なものの中に普遍的なものを見るとき象徴表現シンボリックが生まれる(大意)、と言っている。

(二〇) 註(一) 前掲書、六三頁所収。

(二一) 註(一) 前掲書、一三一頁所収。作者はアレクサンダー・フォン・グライヒェンールスヴルム。

(二二) 註(一) 前掲書、三四一頁。

(二三) 作品が素材だけで成り立つのではないことは言うまでもない。材料を生かすも殺すも腕次第ということがある。とりわけアネクドートにあっては語り口の巧拙、あるいは文体の精錬度ほときに殆ど決定的意味を持ちさえする。しかしここでは芸術的造型の問題には立ち入らない。

(二四) 註(一) 前掲書、三四〇頁。

(二五) 現代教養文庫(社会思想社 昭和五十年) 一七二頁。長谷川松治訳。

(二六) 註(一) 前掲書、三四一頁。

\*

なお基礎的参考文献として、註で挙げたもののほかに次の二つを付け加えておく。

André Jolles : Einfache Formen. Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1974.

Hermann Bausinger : Formen der „Volkspoesie“. Erich Schmidt Verlag, Berlin 1968.